書評

故小島孝三郎著

『現代文学とオノマトペ』の紹介

長田久男

この著書紹介を光栄としながらも、著者の生前でないことが残念である。小島さんの「オノマトペ研究」の全貌を紹介する力はないけれども、生前親しくしていた友人の一人としてこの小文をしたためる。

本書は、著者生前自ら撰び編集した論文集である(巻末小記による)。論文目録によると、オノマトペに関する研究をはじめて発表したのは昭和26年である。小島さんは、それからおよそ20年余りオノマトペの研究を続けておられたのである。この論文集は、その中の後半の昭和37年以後の論文の中から10篇を撰んで一書としたものである。

『オノマトペの研究序説』という書名に、小島さんが執着しておられたのは、「これがまさに序説であること」そして「この先がすでに構想されていたこと」を意味している。小島さんには、その先がすでに見えていたのであろう。

著者は、オノマトペの用法に三つの段階を認める。①信号的用法(一次オノマトペ)②記号的用法(二次オノマトペ)③象徴的用法(三次オノマトペ)の三つである。第三段階のオノマトペの象徴的用法に著者は最も関心を持ち、具体的にはそれを研究の中心としている。本書の全体を貫いているものは、オノマトペの象徴的用法についての実証的解明である。しかし、著者の研究は、そこで止まらない。

オノマトペの象徴的用法は、作者の内面的情緒を暗示的に伝えるものであるが、……詩人作家の創造的精神が、オノマトペの造型に微妙に反映している点が問題となる。

対象→オノマトペ←情緒

の図式によって示すことができるように、対象への密着と作者の情調とがオノマトペを接点として表現される際、これが作者の個性的表現様式と関わってくるのである。(七〇頁)

として、「オノマトペの様式論」の樹立に、非常な情熱をかたむけそれを志向しているからである。

著者は、その「序」で、

これまでオノマトペに対する研究は、国語学界では余り稔らなかった。(中略)従って、詩語、文学語としてのオノマトペの効用などには殆ど目をくれようとはしなかった。研究者が〈科学〉の領域をわきまえていて、言語の意味を文学作品そのものの中に位置づけて捉える態度に欠けていたと言えよう。(三頁)

と述べているが、ソシュールの言語学以来「パロール」の研究を棚上げしているかに見える国語学界に対して、本書は、パロールの研究としての「オノマトペ研究」の位置づけを問うたものであるとも言える。

本書は、3篇10章（三四五頁）からなる。章を追うてその概略を紹介する。

第一篇オノマトペ研究序説（約一四〇頁）

第一章　オノマトペ研究序説

第二章　オノマトペの象徴的用法

第三章　オノマトペの様式㈠

第四章　オノマトペの様式㈡

第一章では、オノマトペに関して従来取りあげられた諸問題、すなわち、語原的研究、共時論的研究、音声心理学的研究、記号的性能と暗示的性能についての研究、模写象徴説などを概観して著者の目ざすオノマトペ研究の方向を明らかにしている。それを受けて第二章では、著者が最も関心を持つ中心課題、オノマトペの象徴的用法を取りあげている。オノマトペの信号的用法、記号的用法、象徴的用法の解説ではいずれも豊富な用例をあげているが、信号的用法の解説で、著者は、長女令子さんの生後一年目ごろのオノマトペの用例をあげている。「巻末小記」によると、この本の校正には、主にご遺族の方があたられたとある。この部分の校正をなさったであろう長女令子さんのご心情と若き日の故人を思うこと切である。

さて、第三章では、はじめに「様式」の概念を述べ、次に、三好達治の詩「横笛」でオノマトペ「ひょう」を「ひょろ」と編集者がまちがった誤植事件を例にして彼の詩が写実的な「ひょろ」でなくて、象徴的な「ひょう」でなければならないオノマトペ表現の必然性を証明している。

第四章では、オノマトペの「音楽的象徴」から「心象的象徴」へと大きな転換を遂げるいわば過渡的な詩人の一人として宮沢賢治の場合を例にしている。オノマトペ使用の数量的処理をも併用しながらオノマトペを中心とした文体論的解明である。

著者は、オノマトペ象徴化の必要条件を四つあげる。

条件Ⅰ　所与の聴覚印象の表現は、作者が既に自己の内にもっている情感、またはその印象によって触発された情感との関連上、どうしてもオノマトペによらなければならないこと。

条件Ⅱ　その表現は、その場合、どうしてもそのオノマトペによらねばならないこと。

条件Ⅲ　そのオノマトペは、その文章で、構文及び構想上、どうしてもその位置でなければならないこと。

条件Ⅳ　そのオノマトペ表現を含む文章は、その一語を取り除くと、表現価値を低下し、文体のぶちこわしになること。

この条件に基づいて分析しているのが、著者の方法である。

第一篇において示した研究方向・態度・方法によって現代詩歌を解明しようとしているのが第二篇である。そして、現代小説を解明しようとしているのが第三篇である。いわば、各論の「その一」が第二篇であり、各論の「その二」が第三篇という構成である。次のような内容である。

第二篇　現代詩歌とオノマトペ（一二八頁）

第一章　現代詩におけるオノマトペ象徴化

第二章　現代詩歌におけるオノマトペ㈠

第三章　現代詩歌におけるオノマトペ㈡

第三篇　現代小説とオノマトペ（五七頁）

第一章　三島由起夫「金閣寺」
第二章　深沢七郎「楢山節考」「東北の神武たち」
第三章　太宰治「トカトントン」

著者の文章構成は、細部にわたっても極て論理的である。例えば、各章には「はじめに」があり「論証」があり「まとめ」があるので、読者は理解しやすい。

第二篇、第一章では、方法論の論述に重点をおき、第二章では、明治・大正・昭和の短歌の歴史の中でオノマトペはどのように使われていたか、オノマトペのどのような性格を生かしているかを述べている。それを詩の上で見たのが第三章である。さらに第三章では、明治大正詩史の中で、オノマトペが時代の文学思潮・文学上の主義・流派の傾向なりを越えて、詩人の個性的様式としてどのように象徴化を達成しているかという点について、白秋と朔太郎の場合について触れている。

第三篇の小説の場合、第一章では、三島由紀夫の作品「金閣寺」をオノマトペを通して解明しようとしている。「オノマトペの脈搏を計って三島の文体を診断しようとするのである」（二八五頁）と著者は言う。すなわち、まず三島のオノマトペ観を紹介し、次に作品「金閣寺」の中で使われているオノマトペが極めて少なく、厳選されたものであることを述べ、最後にオノマトペによる表現の必然性を解明している。

第二章の深沢七郎の「楢山節考」と「東北の神武たち」については、

深沢の用いるオノマトペは、〈ガーン〉によって象徴されているように、〈ゴロゴロ〉にしても、〈ピクピク〉〈ガクガク〉にしも、いずれも月並で、どこといって取り柄のないどちらかというとやや粗雑にも見えるものばかりである。ではなぜそのようなオノマトペを恬然と用いているのであろうか。それこそ、〈民話的なムードの形象化〉の一面であり、それが又彼の文体らしきものとも言い得る。強いて言うならば、彼はこの種の単純なオノマトペの中に美を韜晦する技巧を心得ているかに見うけられる。

と解釈している。

第三章の大宰治「トカトントン」については、「この作品のすべはて〈トカトントン〉によって象徴されているように思う」（三三七頁）と述べ、

作者はこの作品を通じて、戦後の平和や自由の何たるかを皮肉っている。世のすべての秩序に背をむけ、その無秩序を嘲っている。――そうした態度がこの〈トカトントン〉のおどけたような、ふざけたような、冷笑するような韻きとなっている。

と結んでいる。

本書は、論文集とはいいながらも最初から一つの構想に基づいて一続きに書かれた著書と同じく大系を持っている。著者の「跋」によると、「出版に当ってかなり補正を加えた」（三四〇頁）とある。補正はあったであろう。しかし注目したいことは、十年余りの間に発表された一つ一つの論文が、一つの大系のもとに準備されていたという著者の構想力である。国崎望久太郎先生の「巻末小記」にある（三四四頁）「卓越

した頭脳と柔軟な感性に恵まれた著者」に深く思いあたるのである。本書が、著者の恩師国崎先生を中心とする立命館大学の諸先生の御高配と関係者の御尽力とによって短日時のうちに出版されたことを、御遺族とともに私も深く感謝し、この書の紹介を終る。（昭和四十七年十月刊　A5版　三四五頁　二八〇〇円　桜楓社）

――昭和三七年院修了　岡山大学助教授――

昭和四十八年三月十五日印刷
昭和四十八年三月二十日発行

定価　百五十円

論究日本文学　第三十六号

編集兼発行者　立命館大学日本文学会　田中文雅
印刷所　京都市下京区七条御所ノ内中町五〇　中村勝治
発行所　京都市上京区河原町通広小路西入ル　立命館大学日本文学会

本会への**入会申込・会費の払込**はすべて左記へお願い致します。

入会金　五拾円
会費　六百円（卒業生）　五百円（在学生）

京都市西陣局区内
河原町通広小路西入ル
立命館大学文学部内
立命館大学日本文学会
振替　京都三八八三番